

所謂「発見」「確認」「想起」の‘夕’考

村 松 由起子

0 はじめに

従来、夕形の意味・用法のなかには、「発見」「確認」「想起」があると言われてきた。

「発見」の夕形とは、

1) あっ、ありました。ここですよ。

のような夕形であり、「確認」の夕形とは、

2) あすの午後は会議がありましたね。

のような夕形であり、「想起」の夕形とは、

3) あっ、あすは約束があった。

のような夕形である。

しかし、‘夕’そのものが果たして所謂「発見」「確認」「想起」を表わしているのであろうか。

次の例を見てみよう。

4) あっ、あります。ここですよ。

5) あすは会議がありますね。

6) あっ、あすは約束がある。

これら、4) 5) 6) の表現は現実での言語生活においてよく見聞きし極めて自然な表現であり、これらも「発見」「確認」「想起」の表現の仲間とすることに何ら異論はなかろう。

そこで本稿では、「発見」「確認」「想起」を表わしていると思われる1) 2) 3) のような夕形の使われる場合と、4) 5) 6) のようなル形の使われる場合との相

違を考察していく。

1 考察の対象

これら「発見」「確認」「想起」は、状態を表わす述語に多いことが従来の研究で指摘されてきた。状態を表わす述語とは、寺村1984¹⁾によると、

- a 名詞+ダ (の類)
- b 名(詞的形) 容詞+ダ (の類)
- c 形容詞
- d 状態を表わす動詞

である。そのなかでも「イル・アル」を用いた表現が多く、本稿でも「発見」についてはこの「イル・アル」の表現を中心に論を進めていく。

以下、「発見」「確認」「想起」の順に考察する。

2 発見

国広1967²⁾はタ形の意味・用法の1つとして“ある状態が過去から現在にわたって継続していることに今気が付いた”という用法をあげ、これを「発見のタ形」と呼んだ。

高橋1985³⁾も国広と同様にこのタ形を「発見」とし、“現在存在しているものを発見したとき、「あった」「いた」で表わすことがある。これは、「ある」「いる」でもあらわせるのだが、過去形にすると発見という認識活動が成立したこともあらわすことになる”と述べ、タ形が「発見という認識活動が成立した」ことを表わすとしている。

タ形が「発見」を表わすとする説に対して、寺村1984⁴⁾は“しかし、単に「発見」というのは充分な特徴づけとはいえないのではなからうか。思いがけずあるものを発見して、

オヤ、コンナトコロニ傘ガアル。

蟹ダ！蟹ガイルヨ！

というのもごくふつうであろうから”と指摘している。

寺村のいうように、「発見」というだけではこのタ形の説明にはなっていない。タ形は使われていないが、次の(7)~(11)も、やはり何かを「発見」しての発話だからである。

7) あら。こいがありますわ。白いこいがありますわ。

8) おや、あそこにコジュケイがいるよ。

あんなところへ遊びに来てやがる。「駅前旅館」

9) 毛虫がいますわ! 「山椒魚」

10) あっ、へび!

11) あれっ、ぼくのケーキがない。誰が食べたの。

国広や高橋のいうようにタ形が「発見」を表わしているとするならば、7)~11)は何が「発見」を表わしているのであろうか。

そもそも、「発見」というのは、何かを見つけたということであり、何かを見つけてそのことに関して述べる発話にはすべて「発見」のニュアンスがあると考えられる。7)~11)と次の12)~14)は何かを見つけてそのことに関して述べているということでは共通している。

12) こんなところにあった。ころんだときうしろのほうへ放ったんだろう。

(高橋 1985)

13) あった。あった。なあんだ。こんなところにつこんであったんだ。

(同 上)

14) 「いた!、いた!」声がして、清がくる。

これらの例から明らかであるように「発見」を表わしているのはタ形そのものではなく、「何かを見つけてそれについて述べる」という場面的な要因から「発見」のニュアンスが表わされているのである。

では、従来、タ形が「発見」を表わしていると考えられてきたのは何故であろうか。

それは、タ形をル形との対立で捉えようとした結果、ル形が「現在の状態」を表わし、タ形が「過去の状態」を表わす(状態的述語の場合)⁵⁾と考えたため、「発見」「確認」「想起」のような現在存在する事態に関して使われるタ形を、タ

形の特別な用法として扱ったのであろう。

それでは、

15) あっ、ここにある！

16) あっ、ここにあった！

のようなル形とタ形の違いはどのように考えたらよいのであろうか。

寺村は⁹⁾、このタ形を“ある事態を思い描き、期待あるいは心配をし、それがある時の経過の後実現する”「期待(=過去の心象)の実現」であるとした。

しかし、その一方で、その存在を期待していたわけではなく、偶然見つけているのにタ形が使われる例もあるとし、そのようなタ形を「どう考えればよいのだろうか」と述べている。次は寺村のあげている例である。

17) この男、ほかにも妙な癖がある。自分の持っている銭を、人の知らない間に石崖の穴かどこかに隠しておいて、「おや、ここに銭があった。こいつで一ぱい飲もう」と云って人に御馳走する癖がある。

確かにこの場合、「銭」を探していたわけではないが、「こいつで一ぱい飲もう」と云って人に御馳走する癖がある」とあるように、「一ぱい飲みたい」というような願望が「銭」を見つける以前にすでにあったと考えられる。

そう考えると、やはり 17) も過去においてある事態(この場合は「銭があれば一ぱい飲みたい」など)を思い描いており、銭を見つけたことと過去の心象とを話し手が結び付けて捉えていることでは、探していたものを見つけた場合と共通するといえる。

次の例でも 17) 同様、その存在を探していたわけではないが、タ形が使われている。

18) 何だ、お前まだいたのか。「卒業」

この 18) の場合も、過去の心象として「すでにその場を去っているはずだ」というような事態を思い描いているといえよう。そして、その思い描いていた事態と「いま相手が目の前にいる」事態とを話し手が結び付けて捉えているために、タ形が使われているのである。

次の 19) 20) 21) は、従来では「発見」を表わすとされてきたタ形であるが、「あるものを探す」というのはやはり過去の心象の一つといえる。

19) テグスなんか、どうでもいいさ。いやここにあった。心配しなくてもいい。

「山椒魚」

20) 老僧は、精神を集中して、白ペンキで明示してある番号を、次々とみてゆく。「あッ、ありました。ここですよ」と彼は叫んだ。 「上海の蜃」

21) あるッ、ないの？おかしいねエ、ええ？袂は？……あ！足袋ン中にあった」
「古典落語」

ではル形の場合はどうであろう。

先の7) 8) 9) はル形が使われている例であった。

これらの例では、タ形の場合のような過去の心象との結び付きが感じられない。

19) 20) 21) のタ形と例の7) 8) 9) とを比較してみると、タ形のほうはある特定のものを探してそれを見つけたときの発話であり、ル形のほうは思いがけずに見つけたときの発話である。この違いは、19) 20) 21) では「何」が存在するのかが表現されておらず「どこ」(下線部) に存在するのかが述べられているのに対し、7) 8) 9) では「何」(下線部) が存在するのかが述べられていることにも表われている。

7) あら。こいがいますわ。白いこいがいますわ。

8) おや、あそこにコジュケイがいるよ。あんなところへ遊びにきてやがる。

9) 毛虫がいますわ！

19) テグスなんか、どうでもいいさ。いやここにあった。心配しなくてもいい。

20) 老僧は、精神を集中して、白ペンキで明示してある番号を、次々とみてゆく。「あッ、ありました。ここですよ」と彼は叫んだ。

21) あらッ、ないの？おかしいねエ、ええ？袂は？……あ！足袋ン中にあった」しかし、タ形が使われるときには存在するものは述べられず存在するところ(所在)が述べられ、ル形が使われるときには存在するものが述べられるか、という。と必ずしもそうではない。先の17)の「おや、ここに銭があった」においては「銭が」という存在するものが述べられ、15)の「あッ。ここにある！」においては存在するものが述べられていない。

従って、上記のことはあくまでル形・タ形が使われている用例の傾向としていえることである。

以上のことから、本稿では発見の場合におけるル形とタ形の違いを次のように考える。ル形の場合は、話し手は現在の事態のみを捉えており、タ形の場合は、話し手は現在の事態を話し手の過去の心象と結び付けて捉えている。このため、話し手の捉え方によってはル形を使うこともタ形を使うこともできるのである。

つまり、話し手があるものを発見して、そのことを現在の事態としてのみ捉えて述べる場合には、

15) あっ、ここにある！

のようにル形となり、現在の事態を話し手の過去の心象と結び付けて捉えて述べる場合には、

16) あっ、ここにあった！

のようにタ形になるのである。

あるものを探していてそれを見つけた場合にタ形がよく使われるのは、「探す」という行為それ自体が過去の心象と切り離して存在するものではないため、話し手は現在の事態を過去の心象と結び付け易いからである。

また、思いがけず何かを見つけた場合にル形がよく使われるのは、「思いがけず」ということ自体、現在の事態と結びつけられる直接的な過去の心象がなかったということなので、話し手は現在の事態を過去の心象と結びつけて捉えにくいからである。

思いがけずに何かを見つけた場合に話し手が現在の事態を過去の心象と結びつけて捉えられるとしたら、それは17) 18)のようにやや間接的ではあるが、現在の事態に関係する過去の心象が存在するからであろう。

3 確 認

次に「確認」について考察していく。

国広1967⁷⁾はタ形には“過去から現在にわたって当てはまる事柄を話者あるいは相手自身は承知していることを暗示しながら、相手にその確認を求める”意味・用法があるとしている。次の21)~26)は国広が「確認」の例として挙げているものである。

- 22) 七分の一は循環小数だったね。
- 23) きみはたしかおっかさんがいたね。
- 24) また、外国語が出ましたな。ノウは英語にもありましたね。
- 25) きみは酒はだめだったが、たばこは吸ったね。
- 26) 油絵をお描きになりましたね。
- 27) あなたはどなたでしたか。

これらの例では27)以外はすべて文末に「ね」が置かれている。このことから、「確認」はこの「ね」が表しているのではなかろうかと予測できる。次の28)～32)は22)～26)から「ね」を取り除いたものである。

- 28) 七分の一は循環小数だった。
- 29) きみはたしかおっかさんがいた。
- 30) また、外国語が出ましたな。ノウは英語にもありました。
- 31) きみは酒はだめだったが、たばこは吸った。
- 32) 油絵をお描きになりました。

これら「ね」を削除した表現が「確認」を表しているとするのは無理である⁸⁾。だとすると、22)～26)が「確認」を表しているのはやはり「ね」があるからであり、そうだとすればタ形が「確認」を表しているのではないことになる。

さらに、次の33)～37)のように文末に「ね」を置けば、ル形を使っているもやはり「確認」を表わす。

- 33) 七分の一は循環小数だね。
- 34) きみはたしかおっかさんがいるね。
- 35) また、外国語が出ましたな。ノウは英語にもありますね。
- 36) きみは酒はだめだったが、たばこは吸うね。
- 37) 油絵をお描きになりますね。

また、高橋もモーダルな性格のタ形として「確認」をあげている。次の3例は高橋の例であるが、3例とも、やはり「ね」が使われている。

- 38) ところで、はなしはちがうけど、先生のクラスに浅井吉男という子がいましたね。
- 39) 石井君とかいましたね。きけば、あんたも死刑囚だそうだが、よくおちつ

いていられますね。

40) きょう職員会議がありましたね。

では、文末に「ね」がつくと、何故に「確認」を表わすのであろうか。

梅原1989⁹⁾は「あれは富士山ね。」の「ね」について‘意味的には一種の確認表現を構成する’としている。梅原によると“このような確認表現構成の働きは、「ね」「よ」「さ」が本来持っている働きではなく、これらが間投助詞として持っている意味的特徴が、特殊な構文的位置で形を変えて現われたもの”である。梅原のいう「間投助詞として持っている意味的特徴」とは、“聞き手に呼びかけて語勢を強める”という特徴である。

「ね」に確認表現を構成する働きがあると断言するには多少問題があるが、「ね」の「聞き手に呼びかけて語勢を強める」という意味的特徴から「確認」の意味が現われていると考えてもよさそうである。

それでは、27)の「ね」が使われていない場合はどう考えたらよいのだろうか。

27)は「確認」を表わすというよりも、むしろ次章で扱う「想起」を表わしていると考えられる。

三上1972¹⁰⁾は27)のような例を“相手を既に知っているという気持ちを表わすことが敬意になる”「儀礼的な問い」だとしているが、寺村1984は、これを“忘れていた過去の認識を思い出す”用法として扱っている。27)はむしろ「想起」の用例とするのが妥当であろう。

次に、「確認」の場合におけるル形とタ形の違いについてみていく。

次の41) 42)のル形とタ形の違いは何であらうか。

41) あす職員会がありますね。

42) あす職員会がありましたね。

ここでのル形・タ形の違いも、「発見」のときと同様に、話し手が、過去の心象と結びつけて捉えているか否かの違いであるといえないであらうか。つまり話し手が現在の事態や既にその実現が確実な未来の事態を過去の心象と結びつけて捉えた場合にタ形が使われ、現在や未来の事態のみを捉えた場合にル形が使われると。

ここで、この予測の妥当性を検討してみることにする。

41) の例では「毎週月曜日に職員会がありそしてあすは月曜日である」というような「職員会が行われるはずだ」と話し手が判断できる前提があり、その判断が正しいか否かを「確認」しているようである。

一方、42) の例では「あす職員会がある」ということ自体がすでに前提として存在し、その前提が正しいことを「確認」しているようである。

この違いは、次のような“前の事柄を受けたあとの事柄が生ずることを示す”¹³⁾ 接続詞「では」を付けてみると明らかになる。

43) では、あす職員会がありますね。

44) ?では、あす職員会がありましたね。

このことから、タ形の場合は「確認」する事態そのものはすでにその存在が前提となっており、その前提をあらためて「確認しているのだといえよう。とすると、「確認」の場合におけるル形とタ形の違いは、過去の心象を結び付けているか否かであるとするよりは、その事態が存在するという前提と結び付けて捉えているか否かであるとしたほうがよさそうである。

4 想 起

次に「想起」についてみていく。

三上¹²⁾ はル形とタ形の対立の一つとして「想起と主張」を挙げ、

一 明日、ゴ都合ハドウデス？

一 明日ハダメデス、明日ハ研究会ガアリマシタ。

は“規定の予定を想起した言い方といえよう”としている。

国広¹³⁾ はこのタ形を“過去において確定していた未来の行事・計画を発話時に思い出した”用法としているが、このタ形は「未来の行事・計画」以外に「現在の事態」を思い出したときにも使われる。次の例は、高橋¹⁴⁾ が「思いだし」のタ形として挙げているものである。

これらは「現在の事態」を思い出している例である。

43) ああ、そうだ。手りゅう弾があった。

44) そういえばそんなような歌があったなア。

しかし、これらのタ形が「想起」を表わしているかというところではない。次の45) 46)も話し手が「想起」して述べている場合であるが、タ形ではなくル形が使われている。

45)「忘れていた。いいものがある。」とわたくしは京橋で乗換の電車を待っていた時、浅野海苔を買ったことを思い出して、それを出した。

46)「お隣の葉鶏頭もいい色になっていますよ。」

保子はそう言って坐った。

「葉鶏頭は、あの日まわりが植わってた家にもあるな。」と信吾は言いながら、あの立派な日まわりの花が、嵐に吹き落されていたのを思い出した。

つまり、何かを思い出して述べるのであれば、ル形でもタ形でも「想起」になるということである。さらに、次のように、ル形・タ形を使っていなくても「想起」になる。

47) あっ、洗濯物！

このことから、「発見」「確認」の場合と同様に、「想起」の場合もタ形自体が「想起」を表わしているのではないと考えるのが妥当であろう。

では、「想起」の場合におけるル形・タ形の違いは何であろうか。

「想起」とはそもそも“以前あったことをあとになって思い出すこと”¹⁵⁾である。そのため、すべての「想起」の場合に、話し手は現在或いは未来の事態を過去の事態と結び付けることが可能である。しかし、「想起」ではなく、次のような「思いつき」の場合には、結び付ける過去の事態が存在しにくいため、やはり、ル形のほうが自然である。

47) あっ、そうだ。いい考えがある。

このことから、「想起」の場合のル形・タ形の違いも、話し手が現在或いは未来の事態を過去の事態と結び付けて捉えているか否かの違いであるとしてよからう。

本稿では扱わなかったが、「想起」の場合と「確認」の場合には、それらの表現に使われる述語が限られている。寺村¹⁶⁾は“この用法は状態的述語に限るようである”と述べ、

46) *明日ハ彼ト会ッタ

といえないが、「ノ」をつけて名詞化して

50) 明日ハ彼ト会ウノダッタ

とすればよいとしている。

「確認」「想起」の場合には状态的述語に限られる理由については今後の検討課題とする。

5 まとめ

本稿では従来タ形の用法として扱われてきた「発見」「確認」「想起」について考察したが、その結果、タ形自体がこれらの意味を表わしているのではなく、発話となされる場面的な要因（文末に「ね」が付き得るかどうか場面的な要因によると考える）によって「発見」「確認」「想起」の意味が表われることが明らかとなった。

以上の考察から、これらの所謂「発見」「確認」「想起」におけるル形とタ形の違いは、話し手が現在の事態、あるいは既に実現することが決定している未来の事態を過去の心象やその事態が存在するという前提と結びつけて捉えているか否かにあるとしてよからう。

注

- 1) 寺村秀夫 1984『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版 P.81
- 2) 国広哲弥 1967『構造的意味論』三省堂 P.66
- 3) 高橋太郎 1985『現代日本語のアスペクトとテンス』秀英出版 P.216
- 4) 寺村 1984 P.106
- 5) 例えば 寺村 1984 P.82

状态的述語がある状態を事実として述べるのに使われるとき、その基本形は、話し手が、その発話時点で、その述語によって表わされる状態が存在することを表わし、過去形は、発話時より前にその状態が存在したこと、いいかえると、その状態が過ぎ過ったときのことであることを表わす。

- 6) 寺村 1984 P.105
- 7) 国広 1967 P.66, P.67
- 8) イントネーションによっては「確認」のニュアンスが現われるようだが、イントネー

ションによって「確認」のニュアンスが現われたり現われなかったりするの、「確認」を表わしているのはタではないということである。

七分の一は循環少数だった？（確認）

七分の一は循環少数だった。

- 9) 梅原恭則 1989「助詞の構文的機能」『日本語と日本語教育4』明治書院 P.323, 324
- 10) 三上 章 1972『現代語法序説』復刊くろしお出版 P.220, P.227
- 11) 『現代国語例解辞典』小学館 P.855
- 12) 三上 1972 P.225, P.226
- 13) 国広 1967 P.66
- 14) 高橋 1985 P.217
- 15) 『現代国語例解辞典』小学館 P.711
- 16) 寺村 1984 P.339, P.340

(むらまつ ゆきこ 日本言語文化)